

# 神の器としての神谷美恵子：自己肯定、罪の意識 そして医学

著者	葛井 義憲
雑誌名	名古屋学院大学研究年報
号	20
ページ	20-34
発行年	2007-12-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000580">http://doi.org/10.15012/00000580</a>

# 神の器としての神谷美恵子

——自己肯定、罪の意識そして医学——

葛井義憲

はじめに

「神谷(旧姓、前田)美恵子は聖者」であると評した人物がいる(『神谷美恵子の世界』、二〇〇四年、八六頁)。それは美恵子(一九一四—一九九一年)の父前田多門の友人で、同じ新渡戸種造の門下生であった鶴見祐輔(一八八五—一九七三年、衆議院議員)の長男鶴見俊輔である。彼が美恵子を「聖者」とみなした理由は、彼女が「どんな人とも、同じ目の高さでつきあう」ことができるのだということを知ったからである。そしてこれは後年、美恵子が人口に膾炙する作品(『生きがいについて』、『人間をみつめて』、『こころの旅』、『ヴァジニア・ウルフ研究』など)を次から次へと表し、精神科医としてハルセン病者の苦渋に心を一途に寄せ、また、神戸女学院大学、津田塾大学の教授として学生たちへの教育指導を踏まえた上での評価ではない。俊輔が美恵子を「聖者」だと判断したのは、本稿でも取り上げる一九三八年秋ごろ、二四歳の美恵子にアメリカで出会った時のものであった。

しかし、その「聖者」の底に深く、大きな苦悩がひそんでいた。俊

輔がアメリカで会ってから、五年後の彼女の「日記」(一九四三年九月)に「altruistisch [利己的] なところも、ästhetisch [美学的] なところも、hedonistisch [悦楽的] なところも、みな自分の、人間の、ありのままの姿ではないか」(『若き日の日記』、一九八四年、一一九頁)とあるように、彼女はこの「日記」を記述する以前から自らの存在を受容することに苦悩した。自らの複雑多岐にあえいでいた。彼女は音楽(バッハ)を愛し、創作すること(詩、小説)を求め、真理(ギリシャ哲学など)を探究し、信仰を深め、謙遜に、地味に使命を求め、生きようとする。これらが若き美恵子には葛藤となり、苦汁となり、辛苦となった。

「夜八時、工場できょうは大分疲れをおぼえた。(中略) バッハのフーガとプレリュードで心が澄んだ。十年前に—否、更に根源的には、父母の染色体がお前という生命に配合された瞬間にお前の運命は定まったのだ。必要以上に女っぽい体と心情の中に置かれた飽くことなき知的欲望、荒々しく烈しい熱情、そして本質的なものにしかなれない心—女として何という「怪物」だろう。「宇宙観」だの「矛盾」だの「使命感」だの、そうしたものに悩み続けねばならぬとは！」

(一九四三年二月二日の「日記」、同書、一三八頁)。

しかし、この苦悩と葛藤のもとから紡ぎだされる彼女の思想、信仰、生き方は人々に多くのことを教示し、生きる力を与える。けれども、そうした苦悩、葛藤の中で練られた広く、深い知恵と高潔な人間性を有す彼女の研究はこれまであまり行われてこなかった。一つは彼女の多才さと複雑さと守備範囲の広さのゆえだろう。また、彼女と関わる人たちが存命であることも原因しているだろう。それ故、本稿も現在、公刊されている資料、参考文献しか用いていない。けれども、既に発表された書籍、論文(江尻美穂子著『神谷美恵子』、柿木ヒデ著『神谷美恵子 人として美しく』、太田雄三著『神谷美恵子のこと―喪失からの出発―』、中井久夫著「神谷美恵子さんの「人と読書」をめぐって」(『本、そして人』所収)など)から本稿を執筆する当たり、貴重な教えを受けたことを記し、感謝する。

筆者が神谷美恵子の書籍を取り上げ、小さなクラスで学生たちと一緒に断続的に学びだしたのは一五年ほど前からである。そして神谷は晩秋に入った筆者がこれからの残された研究期間の中で真剣に向き合いい、「対話」しなければならぬ重要な人物である。本稿は手始めに若き美恵子の精神的苦悩と自らの生きる意義を求めて懸命に「次の道」を行く様態を考察、論述したものである。

## 一 自己肯定

神谷美恵子は著書『遍歴』(一九八〇年)の中に「ペンドル・ヒル学寮の話」を収めている。これは一九三九(昭和一四)年二月から

(四)

六月まで過ごしたアメリカのフィラデルフィア郊外にあるクェーカー(Quaker)の学寮、ペンドル・ヒル(Pendle Hill)での勉学、交友などをつづったものである。彼女は前年の一九三八年一〇月、父母前田多門、房子や弟妹と一緒に渡米した。父多門が朝日新聞社の論説委員からニューヨークに創設された日本文化会館館長に就任したことと、美恵子が母校津田英学塾からアメリカ留学への津田梅子奨学金を一九三七年に授与されたからであった。軍国主義が強まり、日中戦争(一九三七年)が激化する日本を去って、穏やかなペンドル・ヒルでの学寮生活は幼きジュネーヴでの日々も思い出させた。彼女は記す。

フレンドとは十七世紀の初め英国のジョージ・フォックスという人が創設したキリスト教の極左派ともいえる一派で、彼らが礼拝するとき、靈感を感じるあまりふるえるところからクェーカー(ふるえる人)という別名がついた。クェーカーの歴史をここで述べる必要はないが、ともかく英国教会からみれば、非常に異端であった。まず牧師というものを認めない。礼拝は、質素この上ない集会所で行い、讚美歌を歌うのでもなければ説教を聞くのでもない。沈黙を主体とし、何か靈感を感じた人は立ってなるべく短くそれを話す。その内容について討議する者もない。これがクェーカーの「沈黙礼拝」であり、これがかつて幼い頃ジュネーヴで私が母に一回だけ連れて行かれた、あのふしぎな集まりであったのだ、と思いあたった。

この地味な宗旨は現在に至るまで連綿とつづき、アメリカ並びに世界各地に広がり、日本にも来ている。クェーカー教徒は質

素勤勉を旨としているから、自然富を蓄積し、その財力で社会福祉事業、教育事業、牢獄や精神病院の改革など数々の仕事をやってきた。徹底した平和主義で、戦時には良心的兵役拒否をして肉體労働に服し、また交戦国双方の困窮者に助けの手を伸ばしてきた。『遍歴』一〇二頁)

美恵子はペンドル・ヒルで参加したクエーカーの集会(「沈黙礼拝」)の様子と彼ら信仰者のこの世での生き方を素描している。美恵子が育った家庭もクエーカー(フレンド派)の精神が十二分に行き渡っていた。母房子(一八九〇年一月、群馬県富岡で誕生、一九五五年死去)はフレンド派の学校、普連土女学校(東京)で学び、生涯、クエーカー教徒であった。そして多門(一八八四年五月、大阪に誕生、一九六二年死去)との結婚は同じクエーカー教徒で、美恵子には「慈愛のふかいおじさま」で、多門には師である新渡戸稲造の紹介によるものであった。美恵子が回想するペンドル・ヒル学寮生活の背後に、キリスト教精神をもって近代日本国家建設のために尽力し、また、欧米列強の国民と知識、品格、教養などの上で対等な人間となることを強く求めて、家人教育をする前田家があった。そしてその精神は房子が守りつづけたクエーカー精神に与るところ大であったらう。また、房子の弟で、美恵子にも影響を与えた金沢常雄(一八九二—一九五八年)が内村鑑三の弟子として、無教会伝道に携わったことなどから、徹底して聖書に生きようとするものでもあっただろう(「人間を見つめて」二〇〇四年、一三三—一三五頁)。父多門は房子の死後、クエーカー教徒になった(『本、そして人』二〇〇五年、二二六頁)。

静かで、内省的なペンドル・ヒル学寮での生活はスイスのジュネーヴで過ごした小学生時代の日々へとつながり、思いださせる。多門は一九二二(大正一一)年七月、東京市助役を辞し、ILO(国際労働機関)の日本政府代表として家族と共にジュネーヴへ赴任した。小学校四年生の子美恵子は生徒の個性を尊重し、やかましい規則などなく、それぞれの能力に応じて教育を進めるジャン・ジャック・ルソー教育研究所の付属小学校に転校した。校長は有能な発達心理学者のジャン・ピアジェ(Jean Piaget、一八九六—一九八〇年)であった。小学校は楽しく、明るく、希望に満ちた光は彼女をつつんでいた。そんななかで、やすらいだ中に、次の光景も現れる。

お天気でさえあればほとんど毎日、夕方になると自転車に乗ってひとり山道を降りて行く。坂の途中に曲がりかどがあって、そこまで行くと急に広いレマン湖が眼下にひらける。そのかどで自転車を止め、じっと夕陽に光る水面をながめるのだ。ちょうどそのころ、うしろの山の峯々から牛たちが首の鈴をふりふり、村へ降りてくるのが聞こえる。その響きのほかはしんとしていて、だれひとり道を通る者はいない。ただ夕やけの空と、山の本立と、みどりに囲まれ、みどりを映す湖水の深いあいの色と。空がだんだん紫がかり、次第に濃紫、濃紺、灰色と変わって行くまで、身じろぎもせず立ちつくしていた。あれはどういうことだったのだろう。よくはわからないが、おそらく幼いころからあこがれてやまなかった平和と、その平和を生み出す美とをそこで体験したのではないかと思う。

審美的素質もないのに、ここで美などということばを使うのにためらいを感じる。しかし、あれは美というよりほかないものであった。人間の世界に見出しえない調和と美と平和とがこの大自然にあるのだ、ということをつたしめ、それで安心して帰路につくのであったらしい。『存在の重み』、一九八一年、八〇―一頁

この文章（「存在」の重み）の初出は一九七一年二月一三―一七日の朝日新聞（朝刊）に掲載され、美恵子五七歳の時であり、ジュネーヴでの日々から五〇年近くが経ってからである。しかし、ここには、その折の少女美恵子の内に秘められた悲しさ、不安、寂寥が表されるとともに、「震える、小さな自己」を温かく包み、肯定受容する「大いなる存在」と確かに触れ合う情景が鮮やかに描き出されている。

大阪の商家に生まれ、苦学独学して、一高、東大に進み、内務省に入った多門。そして卒業後、内務省の役人となった彼は「群馬、岡山、長崎、東京」などを辞令一つで転々とした『存在の重み』、七五頁。岡山で誕生した美恵子（一九一四年一月二二日）も長崎、東京へと引越す。幼児にとっても、地理的な変化は大きな不安を覚える。さらに、母房子が一九一九年四月、前年より欧米に出かけた多門の身の回りの世話をするためにアメリカへ渡り、美恵子、妹の勢喜子は母方の祖母と叔父金沢常雄のところに同年一〇月まで預けられた『神谷美恵子の世界』、二〇一頁。父母との別れは幼い美恵子に深い寂しさを与えていたのだろう。そうした寂しく、悲しい体験などが自己を確かに受け入れ、見守ってくれる存在を彼女に求めさせていった。美

恵子はその柔和な、大いなる存在に抱かれ、その存在と心の通い合いを実感していたのだろう。

ペンドル・ヒル学寮での生活を終えた翌月の一九三九年七月二一日付けの彼女の「日記」は「今晚の星は雨の晴れた後なので高くて清らかだ。星を仰いで居る時のみ私は私である様な気がする。（中略）私は私の問題をもはや彼「兄、陽一」に考えてもらおうとは思わない。だって私の問題は彼にとって問題になり得ないもの。（中略）自分の問題は神様との間のみで決めるべきなのだ」『日記・書簡集』、一九八二年、一七頁と語る。彼女の祈りは「大いなる存在」と身近に触れ合い、指針を与えられるものであったようだ。この日の「日記」は後で触れる、彼女が医学に進むべきかと悩む折のものである。そしてこのペンドル・ヒル学寮での「沈黙礼拝」は彼女の神秘家（*vine mystikerin*）としての資質を磨き育て、「彼女を育む大いなる存在」「いのちの源で、導き、救う神」への信頼を深めさせるものであった。しかし、この神秘家としての自覚は人間中心的で、理性的な信仰を保つ人々からは訝しがられ、排撃されるものであろう。けれども、美恵子はその偏見を超えて、「すべての存在に恵みを与える神」を通して真理と愛に気づかされ、その「すべてのものに隔てなく、注がれる神の愛」に導かれ、促されて「愛の実践」へと向かっていく『本、そして人』、二二六―二頁、『神谷美恵子の世界』、八七頁。彼女がつづった「ペンドル・ヒル学寮の話」は「P・H（ペンドル・ヒル）での毎朝の沈黙礼拝で（中略）私なりの宗教心は増すばかり」と述べ、そこで出会った英国人の老心理学者、キャロライン・グレイヴスン（Caroline Graveson）の言葉―「宗教的信仰を得てはじめて人間はすべてを超

えた、神の愛を知り、自らも神と人とを愛するようになり、また神に知られるゆえに自己の存在理由を知り、神に守られるがゆえに、どんな場合にも安心していられる」——をジュネーヴの夕暮れに味わった静かな、安らいだ、美しい体験を思い出しつつ記されたのだろう（『遍歴』一一一、一一九頁）。

ペンドル・ヒル学寮での生活は悲哀と不安を秘めた多才な自己を少しずつ受け入れさせ、自ら以外の存在にも心を大きく開かせようとした。そうした中で、彼女の前に医学への道も現れてきた。彼女は渡米後、「コロンビア大学の大学院ギリシャ文学科」に入り、ギリシャ語を読みつづける生活をしていた。しかし、これから自らが一生をかけるやるものを思い描くとき、「いつも浮かんでくるのは医学への志願で」あった（『人間を見つめて』、一三六頁）。

ペンドル・ヒルでの生活を終えた一九三九年夏以降、彼女はコロンビア大学理学部・医学進学コースへの転籍に見通しがついたようだ。彼女の一九三九年八月二二日付けの日記は次のように記されている。「医者になれることを事々に感謝せざるを得ぬ。（中略）病気の人の相手をして自己満足するのが私の目的ではない。（中略）自分がその（肺結核を津田英学塾大学部に進学した一九三五年に発病し、一九三七年に治癒する。）中から癒して頂いただけに「健全なもの」を何と責び、それに何と引力を感じる事だろう。丁度花が太陽に向う様に。だから私は人を、人の心を、体を、社会を、健全にするために一生を燃やしつくしたいのだ。」（『日記・書簡』、二〇頁）。一つの目指すべき世界をつかんだ彼女の喜びと、そこで生きるべきスタンスをも記している。そしてその感慨は次のような言葉ともなって表れる。

一九四〇年三月五日付けの「日記」は「生まれてから、これほど謙虚にあらゆる事を感じ出来た事はあっただろうか。（中略）宇宙を創り、その中に、かかる「我」を創りて置き給いし者を思うほどの深き平安はまたとあるうか。（中略）創られし目的に忠実に生きる、それだけだ。」とある（『同書』、二四頁）。自らが創造されたことへの素直な感謝と自らにも確かに生きる目的、使命が与えられていることを知り、心からの喜びを記している。さらに、それは以下のような文章表現ともなっている。同年四月二八日付けの条は「宇宙にちらばる偶然か、あるいは何者かの大きな意図の下にか、かかる畸形的産物が存在して、小さな役割を果たして行く。それだけの事だ。そこに限りない生甲斐と安心とよろこびを感じる。」と表す（『同書』、一三五頁）。

美恵子の創造誕生も深い神の意図の下になされ、「神の器」としてこの世で果たすべき役割のあることを実感させられた。「私は」私の神と共に道を求め」て歩み、働くのだと、神と自己への信頼を強くさせていった（『本』、そして人』、二六二頁）。

この美恵子の自己肯定は大いなるもの導き、育みと、彼女に影響を与えつづけた人たちによるものであった。その中でも、とりわけ、三谷隆正の感化は大きなものであった。三谷（一八八九—一九四四年）は法哲学者として、一高などで教育研究を行った内村鑑三の弟子であった。しかし、彼は無教会主義だけを「絶対」なものとしないうち、由緒達さをもっていた。その三谷を美恵子は師とみなした。

一九六六年に上梓された『三谷隆正——人・思想・信仰——』に、美恵子も一文を寄せている。この時の肩書きは「長島愛生園精神科医長」となっている。彼女は天へと召された三谷を偲びつつ、「私は



(中略)「三谷」先生をこの世で出会ったほとんど唯一の師と想っている。それほど先生に負うところが大きい。それはただ思想上のことだけでなく、私の生涯での危機の一つを、先生はきびしい批判とともに、稀にみる寛容な思いやりをもって支え、乗りこえさせて下さった。そして反対や障害の多かった医学へのささやかな志を、終始力づくで励まして下さった数少ない恩人の一人である。私の精神形成も、人生行路も、先生との出会いなくしては、まったく異なったものになっていたかも知れない(一五九頁)と述べている。彼女は自らの「精神形成、人生行路」の上で、三谷に多くを負っているのだと自覚していた。三谷との出会いは彼女が肺結核を発病した一九三五年であった。三谷もまた同病を病んだことがあった。また、彼は美恵子の叔父金沢常雄などと友人であった(『神谷美恵子の世界』二〇五頁、川西田鶴子文集、二〇〇三年、三二頁)。美恵子は三谷の信仰姿勢、生き方について、「形式より生命が大切なこと、現世に生きていることの重要性、日々の卑近ないとなみの中に永遠的なものを生かして行く責任のあること(「なごが」(中略)知らぬ間にこちらの心の深いところにしみこんでくる」(『三谷隆正―人・思想・信仰―』一六一頁)と言っている。つづけて「先生の書きもの」を生かすものは一切のてらいもくさみもよどみもない澆刺とした真理と愛への情熱であるから、読む人の心をゆさぶらずにはおかない。真理への愛は先生をしておどろくべき博識と独創的な思索の人たらしめ、人間への愛はすべて病める者、悩める者への、この上もなくこまやかな思いやりとなってあらわれ、またあらゆる悩みや挫折を建設的なものへと転換させようとする力強い励ましとなって人を支えた。先生が生涯病んで、孤独な生活を送っておられたこと、い

かなる形式にもとらわれない信仰に生きておられたことと以上のことは、はなれがたくむすびついていた(同書、一六一―一六二頁)と感謝をこめてつづり、自らも自らのもっともふさわしいやりかたで、自らに与えられた生命と役割に忠実に生きるのだと、五二歳になった美恵子は告げるのである。

それほど、三谷の生きる姿勢は美恵子をとらえるものがあつた。三谷は病いとも孤独をも友としなければならなかつた。彼は一九二二(大正二二)年一月、児玉菊代と結婚し、翌年の三月、長女晴子が授けられたが、三週間後、晴子を失い、同年七月、妻菊代をも天へと送らねばならなかつた(同書、四三〇頁、『川西田鶴子文集』三四頁)。しかし、その悲しみは彼により一層、辛苦の世界、小さき世界に対する「こまやかな思いやり」と信仰に基づく不屈さと希望をもたらしつた。

三谷は一九二九(昭和四)年に発行した『問題の所在』に次のような小さないのちへの「賛歌」の文章を書いている。

たとへば自然を観よ。何といふ調和でせう。そのいとも小き部分、そのいとも大なる部分と調和して、いかに小さきに換らざる大さの役目を果たしていることとせう。そこには何ひとつ無意味または無益と見ゆるものがありません。過日私は満地の雪を見て考へました。何故雪は白いのであるかと。その時私の眼前には北の国なる郷里の暗い冬の空が浮かびました。と同時にその暗い空の下にひろがる地面を想ひました。さうして気づきました、地のその白さの故にいかに明るくされて居る北国の冬かと。その時

私は想つたのです。雪が白いの冬を明るくする為だと。(中略)  
 神の在し給ふ限り、而してその神が愛にして且つ全智なる父であり給ふ限り、野末の雑草を蔽ふ雪一遍の衷にも、何か深い意味のこめられてあるに相違ない事であります。(『三谷隆正全集』第一巻、一九六五年、一七二頁)

神の愛は大自然に、宇宙に等しく向けられ、小さな野末の雪にも、野の花にも、三週間で天へと召されていった長女晴子にも注がれている。三谷の書きものは神秘家美恵子の心にしみ渡り、この世の種々のいのちにおのずと心を寄せさせて行く。そして彼女は「むさぼらぬ人」になりたいとの思いを強くもつようになる。また、三谷的な「謙虚に、謙遜でありたい」と考えるようにもなる(『三谷隆正全集』第一巻、一三四頁)。そして彼女の『若き日の日記』の中で、「人に感じられたとそれが何だろう。(中略)自分でも少しでもよいものを現わすことができるとしたらそれはみな、神から人から、それらより数倍多くの恵みを享けたからなのだ。恩恵は人類共通の財産だ。その分前を多く享けたものは少しでも多くそれを以って人をうるおせ。そうせずに、なおもつと恩恵を頂こうとするのは、それは「むさぼる人」のすることだ。」(一九四三年二月二〇日の条)『若き日の日記』所収、一九八四年、一四二頁)と述べる。

恵まれた豊かな環境に育ち、繊細で、多くのすぐれた能力を有す美恵子はその「恩恵」に感謝しながら、その「恩恵」を独りじめして、貪ることを嫌った。そしてそれは宮沢賢治の作品に触れたときの感想の中にも如実に示されている。一九四三年二月二六日の「日記」は

宮沢賢治の全人格、全生涯をよく表す「雨ニモマケズ」の最後のところ、「ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハナリタイ」を抜書きし(同書、一四二―一四三頁)、翌年一月一日のそれは宮沢の『農民芸術概論綱要』の中の文章、「世界がぜんたい幸福にならないうちには個人の幸福はあり得ない」を抄出している。美恵子は宮沢の作品に触れたことを喜び、彼のように謙遜になって「世界の平和と幸福」を願い、「小さいのちの尊さ」を説き、働く人物になりたいと考える(『日記・書簡』四七頁、『新修宮沢賢治全集』第二五巻、一九八〇年、八頁)。

## 二 罪の意識

美恵子は日米関係の悪化などが原因して、一九四〇年七月、アメリカより帰国した。そして一九四一年六月、医学の世界へ向かうために、東京女子医学専門学校本科へ編入している。美恵子二十七歳の時である(『神谷美恵子の世界』、一〇二頁)。それから二年後の一九四三年八月、光田健輔(一八七六―一九六四年)が園長をしている国立療養所長島愛生園へ一二日間の医学実習のために向かう。その時に作られたであろう一つの詩がある。

光うしないたる眼うつろに 肢うしないたる体担われて 診察  
 台にどざりと載せられたる癩者よ、 私はあなたの前に首を垂  
 れる。 あなたは黙っている。 かすかに微笑んでさえている。

ああしかし、その沈黙は、微笑みは 長い戦の後にちか得られた



るものだ。運命とすれすれに生きているあなたよ、のがれようとして放さぬその鉄の手に 朝も昼も夜もつかまえられて、十年、二十年と生きて来たあなたよ。何故私たちがなくてあなたが？ あなたは代って下さったのだ。許して下さい、癩者よ。浅く、かろく、生の海の面に浮かび漂って、そこはかたなく神達の靈魂だのと きこえよ言葉をあやつる私たちを。かく心に叫びて首たるれば、あなたはただ黙っている。そして傷ましくも歪められたる顔に、かすかなる微笑みさえ浮かべている。『うつわの歌』一九八九年、七―九頁）「これを資料として用いなければならぬので、そのままハンセン病を「癩」という呼称で使用したことを断らせていただく。」

長島愛生園での医学実習は美恵子にピエタ (pieta, 「十字架上で亡くなったイエスの亡骸を抱いて嘆き、悲しむ母マリアたちを主題とした祈念像」) を思わせ、キリストの死を嘆き悲しむ母マリア、弟子たちの思いと重ねさせた (J. Pelikan, *The Illustrated Jesus through the Centuries* (New Haven: Yale University Press, 1997), 12)。そしてこうして診察台のハンセン病患者が「私たちでなく、なぜあなたなのか、あなたが代って下さったのか」とのつぶやきとなって心の底よりわき出た。それとともに、人々に愛と救いをもたらしたイエスの十字架上での叫び―「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。）」（マタイによる福音書27・46）―がマリアや弟子たちの心を突き刺すように、美恵子のそれをも貫き通したようだ。

彼女はこの実習で「負い目の感情」「罪責感 (a sense of guilt)」を

強く抱いたと語る（『人間を見つめて』、一四二頁）。彼女がハンセン病療養所を最初に訪ねたのは一九三三年であった。叔父の金沢常雄が多磨全生園で開かれるキリスト教の集会で話をすることを頼まれ、美恵子はその集会でオルガンをひくことを求められたからである。彼女はその折のことを記している。「このハンセン病という」病気について何も知らなかった者にとって、患者さんたちの姿は大きなショックであった。自分と同じ生を享けてこのような病におそれなくてはならない人びとがあるとは。これはどういうことなのか。どういうことなのか。弾いている賛美歌の音も、叔父が語った聖書の話も、患者さんたちが述べた感話も、何もかも心の耳には達しないほど深いところで、私の存在そのものがゆさぶられたようであった」（同書、一三三頁）。

この訪問は「心の耳には達しない深いところで」全存在をゆさぶるつづける体験となったという。それは言い古された「因果応報」などという言葉で、病者やその近親者を諦めさせ、納得させて、治まるような「ゆさぶり」ではなかった。若い美恵子（一九歳）も、この世界が矛盾、悲哀、不条理の積もったところ（『三谷隆正全集』第一巻、一五四頁）だということを知った。そしてその矛盾と悲哀について、美恵子の「慈愛のふかいおじいさま」である新渡戸稲造は『人生雑感』（一九一五年）で次のように語る。

宇宙全体が悲哀に満ちたものではあるまいかとも思はれ、進化は悲哀の歴史ではなからうかとも疑はれる。故にゲートは歌った「汗を以てパンを食ひ或は終夜睡らずして悲哀に泣いた者にあらざれば、如何なる天賦の力が悲哀の中にあるかを知り得ない」

と、本当だ、人の悲哀は偶然でないなら悲哀には悲哀の使命があるに違ひない。天が人の泣き顔を見るのを嫌ふならば、此悲哀に何か意味が潜んで居る筈である。悲哀の意味を知らぬ人は未だ人生の真相を解しては居ない。(六一頁)

キリストを「悲哀の人」ととらえ、「キリストの苦難の十字架の道」を己が道として生きる教育者、平和主義者新渡戸が『人生雜感』を通して多くの青年たちに語りかけた。しかも、この新渡戸も「悲哀」を深く知るものであった。一人っ子の遠益を生後まもなく亡くし(二八九二年)、新渡戸の栄達を望んでいた母勢喜の死に目(一八八〇年)に間に合わなかった悲しみを持っていた。新渡戸が述べる「悲哀の意味」を美恵子も問わなければならぬ。そしてその時が訪れた。それは前述した肺結核を発病し、一九三五年から三七年まで、軽井沢の山荘での療養生活を送る時であった。彼女はまた死の病と言われていた肺結核と一人で軽井沢で向き合うことになった。規則正しい生活をし、栄養をとり、きれいな空気を吸って、原典で読みたい書物を読むという「修道女」のような生活を行った。フランス語、英語が堪能だった彼女はその療養生活でダンテ(A. Dante 一二六五—一三三二年)の『神曲(Divina Commedia)』をイタリア語で読み、ヒルティ(C. Hilty 一八三三—一九〇九年)の『眠られぬ夜のために(Für Schlaflose Nächte)』をドイツ語で読んだ。また、英語科高等教員検定試験の書物も取り寄せ、学び、一九三五年十一月、同試験に合格し、肺結核も治癒した。しかし、翌年の一九三六年、肺結核を再発し、軽井沢で療養生活に入った。一人での療養生活は真理を求めつづ

ける「死への準備」となった(『人間を見つめて』、一三五頁)。彼女はギリシャ語を独習して、新約聖書、プラトン(Platon 前四二七—三四七年)そして後に翻訳して出版するマルクス・アウレリウス(Marcus Aurelius 一二一一—一八〇年)の『自省録(Ta Eris Heauton)』(創元社より一九四九年に翻訳)などを読破していった。死を見つめる彼女にとつて、『自省録』は心にしみた。

その『自省録』の中に、こんな文章がある。「今後なんなりと君を悲しみに誘うことがあったら、つぎの信条をよりどころとするのを忘れるな。曰く「これは不運ではない。しかしこれを気高く耐え忍ぶことは幸運である。」「執拗に人生に執着した人びとを思い出してみるのだ。天折した人びととくらべて彼らの方がなにか得をしているだろうか。(中略)その時間の相違は短いものだ、しかもその期間どれだけの苦労を経て、どんな仲間と一緒に、どんな身体の中で過ごしたことであろう。(中略)君のうしろに永遠の時の淵が口を開けているのを見よ、また前にももう一つの無限のあるのを。」「明けがたに起きにくいときには、つぎの思いを念頭に用意しておくがよい。「人間のつとめを果すために私は起きるのだ。」自分がそのために生まれ、そのためにこの世にきた役目をしに行くのを、またぶつぶついつているのか。(中略) いったい全体君は物事を受身に経験するために生まれたのか。それとも行動するために生まれたのか。小さな草木や蟻や蜘蛛や蜜蜂までがおのがつとめにいそしみ、それぞれ自」の分を果たして宇宙の秩序を形作っているのを見ないのか。」(神谷美恵子訳『自省録』岩波書店、二〇〇七年、六九—七二頁)。

から松、あか松、白樺などの木々に囲まれ、険しい山々の傍に身を

おき、茜色から濃紫へと移る夕暮れや真つ暗な、静寂の夜と親しむ軽井沢での療養生活は、人間の小ささ、誕生の意義、つかの間のいのち、存在するものの役割、この世の悲哀と苦難などに心を向けさせる。そして繊細ながらも、こうしたことを思索しつづける彼女は療養生活の中で、時には絶望や怒り、自己嫌悪に呻いたこともあっただろう。しかし、耐え忍びつつ、思索し、療養する中で、諦念や希望や使命や神の愛を知ったことだろう。彼女が書籍を通して親しんだ哲学者、シモーヌ・ヴェーユ (Simone Weil, 一九〇九—一九四三年) も『神を待ち望む (Attente de Dieu)』の中で、「神の あわれみは不幸そのものの中に輝きます。慰めない苦しきの奥底で、その中心で輝くのです」(『シモーヌ・ヴェーユ著作集』Ⅳ、一九六七年、五四頁)と言つ。そしてヴェーユは「地球にひろがっている不幸は、私にたえずつきまとい、私をうちのめします。私みずから多くの危険と苦悩にあずからない限り、これらから解放されることはない」(『旅の手帳より』、一九八一年、二六八頁)と呻き、悲哀と不幸に身を寄せ、それらの解放を望み、働きつつ、神の愛に触れていく。

そうしたヴェーユの祈念と類似した生き方を模索する美恵子は一九三六年十二月、詩「うつつわの歌」を作っている。彼女の肺結核の治療はその翌年の一九三七年であった。「死の準備」の中での祈りと思索は次のように詠わせた。

私ほうつつわよ、愛をうけるための。 うつつわはまるで腐れ木よ。 　いつこわれるかわからない。 　でも愛はいのちの水よ、みくにの泉なのだから。 　あとからあとから湧き出て、つきるこ

ともない。 うつつわはじつとしてるの、うごいたら逸れちゃうもの。 　ただ口を天に向けてれば、流れ込まない筈はない。 　愛は降りつつけるのよ、時には春雨のように、時には夕立のように。 　どの日も止むことはない。 　とても痛い時もあるのよ、あんまり勢いがいいと。 　でも同じ水よ、まがりものなんかない。 うつつわはじきに溢れるのよ。 　そしてまわりにこぼれるの。 　こぼれて何処へ行くのでしょうか。 　—そんなこと、私は知らない。 私ほうつつわよ、愛をうけるための。 　私はただのうつつわ、いつもうけるだけ。(『うつつわの歌』、一七一—一九頁)

自らを、神に作られた「うつつわ」とし、その「うつつわ」にもられた神の愛を人々に渡してゆこう。それがいかなる方法で行うかは分らないが、誠実に、自らの神より与えられた役割を果たしてゆこう。軽井沢での療養生活は彼女に使命に生きることを教えつつあった。それは死の病から「生還」したものが、残された「いのち」をこの世の苦悩、悲哀のもとで使い、そこに希望と喜びと幸福が訪れることを念じて、働くことと似ている。「罪責」は長島愛生園訪問以前から、彼女の中にあつたようだ。美恵子は肺結核になる前の一九三四年一月二七日、共に神を見上げ、キリストに従って生きようとした相思相愛の野村一彦(作家野村胡堂の長男、東京帝国大学文学部美学専攻に在学)を腎臓結核で亡くした(野村一彦著『会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと』、二〇〇二年、一三二—一三三頁)。その一彦の思いの分をも背負って、キリストに従って神の愛を表すとはどのようなことなのか。アメリカへの留学はその問いをひそかに心にひめたも

のであったはずだ。

美恵子の著書『遍歴』によると、一九三三年のハンセン病療養所多磨全生園への訪問以来、医学を志向していたという。そして肺結核で療養中もその志は消えることなく残り、ペンドル・ヒル学寮でも、それは温められ、同室の浦口真左（ペンシルヴェニア大学で植物学を専攻）からも医学への方向転換を進められた（『遍歴』、一九八〇年、一三五一―一四二頁）。このペンドル・ヒル学寮時代の一九三九年五月、彼女は父や妹と一緒にニューヨークで開かれた万国博にでかけた。その見学の様子を記した「日記」の五月一三日（土）の条に、「万国博参加館」の中でも一番惹かれたのはPublic Health Medicine「公衆衛生医学」と英国の社会事業の部だ。そうした所の前に来ると、私は吸いついた様になって動かないという。その様子を（中略）代る代る母上に説明した時だった。父上はふと笑いながら言われるには「美恵子は医者になるかなー君も医学にとりつかれたのだろう。それが何か運命なんだろう。いい俺もあきらめた。俺の生きている限り応援してやるからやれ」（中略）突飛な事の嫌いな父上が、そして四年前にあれば私の志望に反対された父上が一あまりの事に圧倒された。翌日の「日記」は「父上はたしかにこれが私の行くべき道だろうと信ずると言われる。「これほど好きじゃ駄目だと思つたよ。何しろもう顔色が変わんだもの」と。母上も「癩病らいびょうのところに行きさえしなければ」と言われる。（中略）私ほもっとも自然な結核患者のことを頭に置いて予防医学に進もうと思う。」と記す（『日記・書簡』、一一―一二頁）。

医学への志向は多磨全生園訪問、療養生活の中でも変わらず保ちつづけられていたことが「日記」より推測できる。しかも、それはハン

セン病医療への志であったことも分かる。けれども、その時は両親の反対が強かったのだろう。しかし、この度の父の許しのもとで、現実化した医学への道は愛する一彦を奪い、自らも病んだ結核を視野に入れた予防医学を専攻しようと思意させる。

しかし、アメリカでの医学修行は日米関係が悪化する中で継続することは難しくなった。一九三九年、コロンビア大学理学部・医学進学コースへ転籍しての学びを中断して、一九四〇年七月、帰国しなければならなくなった。それは断腸の思いであったようだ。帰国後、吉岡弥生の特別な計らいで東京女子医学専門学校本科に編入学が許された（一九四一年八月）。彼女はその時の思いを次のように記している。

日本では女子はまだ大学に入れてもらえない時代で、道は女子医専に行くしかなかった。コロンビア大学とくらべてレベルはぐっと下がると思うと残念でならなかったが、帰国に踏み切るよりはかなさそうに、時局は見えてきた。（中略）父と別れ、戦争の始まる直前に日本に帰った。ただちに東京女子医専の校長吉岡弥生女子にお願ひし、本科へ編入学させて頂いた。全く例外的な措置を許して下さいました先生の度量を感謝するばかりである。（『遍歴』、一五四頁）

### 三 精神医学へ——おわりにかえて——

医学の学びは美恵子に喜びを与えていた。編入学後、一年近くが過ぎた一九四二年五月二〇日の「日記」は「ああ神様、長い長い曲がり

くねった路を歩んだ果てにこんなところにまいりました。人生の門出にまたまいもどったのでございましょうか。ともあれ、これから、新しく歩み出でんとするこの路に祝福を与えたまえ。過去を悔やみはしない、その中によきものを育んでくれた人々に感謝する。(中略)

しかし、これからは全く新しい歩みだ。(中略) 数学がしたい心理学がしたい、と昔は言っていたが、医学はそれらみなを含み、心理などに至っては、医学をせずに心理は出来ないと言ええるのだ。今、この道に進めることを何と感謝したらよいのだろうか。『日記・書簡集』、二八頁」と記す。

内省の人、自らを「畸形の人」ととらえる美恵子は心と魂の分析・考察できる医学を学べることを幸せだとしている。一方、ハンセン病への関心も断ち切られていなかったようだ。一九四二年五月三〇日の「日記」は、吉岡校長が学生たちにハンセン病療養所愛生園訪問と、ハンセン病研究に志願するものを望むと言ったことを記し、吉岡の言葉に「痛いような感じ」と自らの気持ちを写している(『若き日の日記』、二五頁)。そして同年一月九日、ハンセン病の権威である太田正雄(一八八五—一九四五年、東京帝国大学医学部教授)の研究室を訪ねている。太田は医学者であるとともに、木下李太郎の筆名で、作家、詩人、キリシタン史研究者として作品を表した。医学を求め、芸術を愛し、書くことを望む美恵子にとってすぐれた先生との出会いである(同書、四七頁)。この研究室訪問の六日前の「日記」は「木下李太郎選集欲しきものと思つて東中野の古本屋に立ちよるとちゃんとあった。(中略) 太田先生の全貌(?)を知り得る心地してうれし」とある(『日記・書簡集』、三三頁)。そして医学と芸術と創作活動に身をささげる太

田研究室を訪ねた感想をつづった翌日の一〇日の「日記」は「太田先生のお体とお顔は科学と芸術にささげてもやし尽くした体の残骸のようにガタガタした感じがする。長い年月の研究生生活の荷にこごめられた肩を眺めながら科学者の忍耐、克己、努力を思い、深いしわの入ったお顔に、長い年月の間、あらゆる思想や感情にするどく、こまやかにヴァイブレイトした心琴の跡を見た。私もまた自分をもやしつくして、こんなにガタガタになって見たい」(『若き日の日記』、五一頁)と、ハンセン病研究と創作活動に携わる太田の跡を踏んで行きたいとの望みを述べる。

その彼女がハンセン病研究か、精神医学かに迷いだした。それは知人の主治医である精神科医、島崎敏樹(一九二一—七五年、島崎藤村の従弟)に出会ったことによる(『存在の重み』、二七九頁)。一九四三年五月二五日の「日記」は「バッハの曲ばかり組まれた音楽会」にその知人と出かけ、当時、東京帝国大学医学部精神科医局長の島崎と語らったことが記されている。そして島崎の印象は「一種異常なインテンシティを帯びた眉目秀麗な白哲の青年」であったと述べる(『若き日の日記』、九五頁)。その強烈な印象を与えた青年医師が美恵子に「精神医学を勉強したことがありますか」と問いかけて、「ブムケ(O. Bunke, 一八七七—一九五〇年)、クレッチマー(E. Kretschmer, 一八八八—一九六四年)、ヤスパース(K. Jaspers, 一八八三—一九六九年)」たちの書物を次々に貸し、人間の精神世界の深みを知らせていった(『本、そして人』、八八—八九頁)。

美恵子は一九四三年八月五日から一二日間の医学実習に長島愛生園に出かける。同園から戻って以降、彼女はハンセン病の治療にあたる



かどうかに迷いだす。八月二六日の「日記」は「母上「房子」とレプラ志望の話をする。母は良く分つて下さる」(『若き日の日記』、一一二頁)と述べる反面、八月二八日のそれは「果たしてお前に耐えられるか、欲の深いお前に？」と、心のうちの嘯きを記し、つづけて「ひえびえした空気の中で長島以来のことを考え続けている。私は英雄でない」(『日記・書簡』、四四頁)と、自らの決意を鈍らせる不安を記している。

後に、長島愛生園の精神科医長となる美恵子であるが、この時は「レプラ志願」者として邁進することが「英雄的」だと人々からみなされ、それ故、「犠牲、献身」を無理に自らに課すことになることを恐れた。その人々の注目とそれに応えようとする難しさ、厳しさに耐えられるのかと反問しつづけていたようだ。それは一九四三年二月一六日の「日記」にも表れている。「精神科は学問的にレプラより遙かに魅力あり、精神的には人に騒がれること少なく、クランケにかつがれる絶対ない地味なかくれた道として心惹かれる。しかし、すべては聖旨のままに！」(『若き日の日記』、一四〇頁)。彼女は周りから「献身的」だとみなされることなく、「無償」に、地味に働ける精神医学、しかも、自らの精神をも分析理解できるそれに魅せられていった。

そうした変化を、先生の三谷に告げたのだろう。三谷は一九四四年一月一七日付けの書簡で返答している。三谷は答える。「貴女は半年後に早くも御卒業とか、さうして新たに精神医学に心を惹かるとか。然しそれは少し気が多過ぎると思ひます。初めの愛の結核はどうなったのか。小生が云ふと我田引水に聞こえるかも知れぬが、結核は現下日本の最大最深の医学問題だと思ひますがね。レプラだって結核と離して扱へる問題ではないのですか。初めの愛にかへつて、

それだけに専心していただき度思ひます。然る後研究の自然の発展として終にはレプラにも精神医学にもメスが及ぶに至るのは良いが、出発の門戸は最初に志を向けた門戸をそのまま、真直に入つて終ふ方が望ましと思ひます。多才に禍されて多気に誘はるることなきやう、賢明なる貴女の前に敢て婆心を披瀝しました。」(『三谷隆正全集』第五巻、一九六六年、六一四頁)。

これはすぐれて、豊かな、多岐にわたる才能を有し、「人の世の苦しみにあずかりたい」(『若き日の日記』、一四〇頁)との気質をも備えた美恵子を十分に知り尽くした先生三谷の教示である。その先生が一九四四年二月一七日に天へと召された。翌日の美恵子の「日記」は「先生の人格的感化はどれほど深く深いものであろう。お弟子の一人に加えて頂けた幸せを思う。たとえ先生の仰せ通りに(精神科をやらぬで)結核へ行く事が出来なくとも「多気に誘はるる勿れ」とのお言葉を守って一旦えらんだその途を死守して御恩返しをしようと心に誓う。」と恩師の言葉をかみ締めて歩みたいとつづる(『日記・書簡集』、四八頁)。そして「日記」の二月二〇日は「午後一時から三谷先生の告別式、矢内原「忠雄」先生司会、「金沢」常雄叔父様祈祷、守谷英次氏、南原繁先生御話。川西「実三」小父様が略歴をお読みになった」(同書、四九頁)と、内村鑑三の弟子たちの手で、姉三谷民子が院長である女子学院講堂で告別式が行われたことが記されている。そして二月二二日の条は「内村(祐之)先生が一度話しに來い」と伝言されたことが記され、二三日は「午前休んで内村先生に御面会し、九月に入局と決定(中略)後明石(み代)さんと一緒に島崎(敏樹)先生とお話をした。(中略)運命が決定したかと思うと呆然として何事も手に



つかず。ああこれで私もこの世につながれてしまったのか。」(同頁)と記す。

三谷の死後、美恵子の行くべき道が示されていった。美恵子は一九四四年九月以降、東京帝国大学医学部精神科医局に入局することが決まったと記す。そしてこの「日記」に出てくる精神科医、内村祐之(一八九七—一九八〇年)は鑑三の長男であり、当時、東京帝国大学医学部教授であった。三谷の死は美恵子の道を開かせた。多才、多気な彼女は自らの資性、気質をなんとか受け入れられるようになり、「神の器」として「わが道」を求め、歩もうとの境地まで達しだした『本、そして人』(二六二頁)。しかし、その求道はきびしく、果てしない。その果てしなさを髪髯とさせる東京女子医学専門学校卒業(一九四四年九月、首席で卒業)後の彼女の「日記」を抄出して結ぶ。それは東京が空襲に見舞われている一九四四年二月四日の条。自分と全然構造の違う人、自分と何等相通するところのない人の構造や思想をも理解し *empfinden* したい。そういう意味でも精神科はやらねばならぬ。また神経学をも忠実にやっつて *Das neurologisch Bedingte* 「神経学的に条件づけられたもの」に対する理解を深めたい。でなければ *organisch* (器質的) な欠陥を有する人を如何に理解し得ようぞ。人を理解し、包容し、育むこと、このために信仰、学問、芸術、愛、を総動員するのだ。祈り。誰でも、どんな人でも包容し得るように、誰とでも、その人のレベルに立って話ができるように、しかも決して *condescending* (優越感を意識しながらへり下って) *patronizing* (恩に着せるような) でなく、自分もそのレベルの自分を赤裸々に吐露して、そこで相手とぶつかるような真実な態度をとり得

るように。相手に応じて自分の裡なるものを取り出すように、決してまずひけらかすようなことをせぬように。相手にすることはしないで、しかも自分の弱さはさらけ出すように。強さより弱さを出すように。「大地の母」たり得るように」『若き日の日記』、三四—三五頁。

### 資料、参考文献

- 『神谷美恵子コレクション(生きがいについて)』みすず書房、二〇〇四年。
- 『神谷美恵子コレクション(人間を見つめて)』みすず書房、二〇〇四年。
- 『神谷美恵子コレクション(本、そして人)』みすず書房、二〇〇五年。
- 『神谷美恵子著作集3(こころの旅)』みすず書房、一九八二年。
- 『神谷美恵子著作集5(旅の手帳より)』みすず書房、一九八一年。
- 『神谷美恵子著作集6(存在の重み)』みすず書房、一九八一年。
- 『神谷美恵子著作集9(遍歴)』みすず書房、一九八〇年。
- 『神谷美恵子著作集10(日記・書簡集)』みすず書房、一九八二年。
- 『神谷美恵子著作集補巻(若き日の日記)』みすず書房、一九八四年。
- 『神谷美恵子著作集補巻2(神谷美恵子 浦口真左往復書簡)』みすず書房、一九八五年。
- 神谷美恵子著『うつわの歌』みすず書房、一九八九年。
- みすず書房編集部『神谷美恵子の世界』みすず書房、二〇〇四年。
- 野村一彦著『会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと。神谷美恵子との日々』港の人、二〇〇二年。
- 『三谷隆正全集』第1巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第2巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第4巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第5巻岩波書店、一九六六年。
- 南原繁他編『三谷隆正一人・思想・信仰』岩波書店、一九六六年。

- 『新渡戸稲造全集』第9巻教文館、一九六九年。
- 『新渡戸稲造全集』第10巻教文館、一九六九年。
- 『新修宮沢賢治全集』第7巻筑摩書房、一九八〇年。
- 『新修宮沢賢治全集』第15巻筑摩書房、一九八〇年。
- 川西田鶴子著『主に負われて』新教出版社、二〇〇三年。
- 「三谷民子」編集委員会編『三谷民子―生涯・想い出・遺墨―』女子学院同窓会、一九九一年。
- 江尻美穂子著『神谷美恵子』清水書院、一九九五年。
- 柿木ヒデ著『神谷美恵子 人として美しく』大和書房、一九九八年。
- 太田雄三著『神谷美恵子のこと―喪失からの出発―』岩波書店、二〇〇一年。
- 藤倉四郎著『カタクリの群れ咲く頃の―野村胡堂・あらえびす夫人ハナー』青蛙房、一九九九年。
- 佐藤全弘著『新渡戸稲造―生涯と思想―』キリスト教図書出版、一九八四年。
- 拙稿「クエーカーとしての新渡戸稲造」『名古屋学院大学論集《社会科学篇》』三八―三三所収、二〇〇二年。
- 『シモース・ヴェーユ著作集』IV春秋社、一九六七年。
- ヒルティ著・草間平作他訳『幸福論』第一部―第三部岩波書店、二〇〇六年。
- マルクス・アウレリウス著・神谷美恵子訳『自省録』岩波書店、二〇〇七年。
- 岩田靖夫著『アリストテレスの倫理思想』岩波書店、一九八五年。
- R. M. Jones, *The Faith and Practice of the Quakers* (Indiana: Friends United Press, 1927)
- H. Barbour and J. W. Frost: *The Quakers* (New York: Greenwood Press, 1988)
- H. H. Brinton, *Friends of 300 Years* (Philadelphia: Pendle Hill Quakerback, 1965)
- J. Pelikan, *The Illustrated Jesus through the Centuries* (New Haven: Yale University Press, 1997)
- A. E. McGrath, *Christian Spirituality* (Oxford: Blackwell Publishers, 1999)
- G. Martinez, *Confronting the Mystery of God* (New York: Continuum, 2001)
- J. Cropsey: *Plato's World: Man's Place in the Cosmos* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995)
- W. James, *The Varieties of Religious Experience* (New York: Dolphin Books, 1902)
- ウィリアム・ジェイムズ著、比屋根安定訳『宗教経験の諸相』誠信書房、一九五七年。